

近代仏教とアジア——最近の研究動向から——

末木 文美士

一、「思想」特集号から

数年前から近代仏教に関心を持つようになり、縁あって『思想』九四三号（二〇〇二年一一月）で「仏教／近代／アジア」の特集を組むことができた。私自身の仕事の脈絡で言えば、中島隆博との共編著『非・西欧の視座』（大明堂、二〇〇二）に続くもので、後者で広く扱つた「非・西欧」における近代の問題を、焦点を絞つて検討しようというものであった。幸いに予想以上に好評で、いろいろな方から好意ある批評をいただいた。従来、近代仏教に関しては、吉田久一・柏原祐泉・池田英俊らの研究者によつて堅実な研究が進められてきた。^{〔2〕}また、ナ

ショナリズムや戦争との関係についての批判的研究として、市川白弦・中濃教篤・戸頃重基らが大きな問題提起を行なってきた。^{〔3〕}ブライアン・ヴィクトリアによる近年の研究もこのような流れに立つものである。しかし、従来の研究にはいくつかの点で大きな不満があつた。

第一に、近代仏教思想は近代思想の中で周縁に位置するものとして、思想史の中核に置かれるることはなかつた。近代思想史は西欧近代思想がいかに導入され、日本がいかにそれに対応したかということに主眼が置かれてきたが、その際、政治思想か哲学思想かが中心であつた。近代の宗教史の研究も最近は非常に発展しているが、宗教社会学的立場からの新宗教研究が多く、必ずしも既成仏教の思想には光が当てられなかつた。

ところが、じつは西欧近代に対抗する原理として常に知識人の間で意識されていたのは仏教であり、仏教を抜きにした近代思想史は成り立たないといって過言でない。それゆえ、思想史の周縁に特殊な領域として仏教思想があるのではなく、思想史の中核で、他思想とダイナミックに交流する中で仏教思想を把握しなければならない。

近年、新版の『清沢満之全集』の刊行を機に、清沢満之に対する関心が高まり、今村仁司の研究が刊行されたりして、現代思想の中で見直そうという動向が出てきたことは喜ばしいことである。

もともと仏教研究は古典文献学と伝統教学を基盤として出てきているため、近代の仏教に対する関心が薄かつた。仏教の全盛は鎌倉時代で、それ以後は衰退するのみという偏見がまかり通ってきた。日本では、思想史・宗教学・仏教学・歴史学などの領域が別個に縦割りで研究され、お互いにそれぞれの繩張りで研究されるため、お互に乗り入れて研究することが少ない。このために見落とされた領域にはなかなか光が当たらないことになる。とりわけ宗派的な繩張りの大きい仏教は、宗派という枠組みさえなかなか出られない。清沢満之にしても、浄土真宗、それも大谷派内部だけの問題のように長く考えられてきて、思想史の共有財産という発想がなかつた。

第二に、従来の研究は仏教を日本の内で閉ざされた範囲で研究してきた。これは仏教のみに限らない。思想史全体が日本一国主義的な捉え方をされることが多くつた。近代思想に関するて言えば、西欧の影響ということは否応なく認めざるを得なかつたが、アジアとの関係という点にはほとんど発想が及ばなかつた。仏教の戦争協力を批判する場合にも、アジアの思想家たちがそれぞれ独自の観点から日本に対峙していたことへの視点を十分に持てなかつた。日本の近代化の先進やアジアへの侵略は、アジア諸国に複雑な反応を惹き起こした。あるいは日本を模範と見、あるいは日本と交流し、あるいは日本を批判する等のさまざまな対応があり、それらを日本思想史と関連させながら見ていかなければならないが、それは十分に行われていなかつた。日本の侵略への批判はなされても、侵略される側に日本の侵略思想と対峙できるだけの独自の思想があつたということを無視しており、それは無意識のうちの差別観に基づいていたともいえる。そのことを我々は反省しなければならない。

このことは、思想史を見る価値観の問題とも結びつく。従来の研究はしばしば全面的な鑽仰か、全面的な否定か、そのどちらかに傾き、その背景や状況を十分に考慮しながら、思想の位置づけを明らかにするという作業を必ず

しも行つてこなかつた。それは例えば、京都学派の戦争協力問題に関してもいえる。とりわけアジアとの関係は、単純に侵略主義で全面的に悪という決め付けでは見えてこないところが大きい。インドの独立運動の活動家が日本に親近感を抱き、日本のアジア主義者と関係が深かつたこと、中国の場合でも、中国の佛教者ははじめは多く日本賛美で、次第に日本批判に転じながらも、複雑なところが残ることなど、きめ細かい分析が要求される。アジアに出て行つた日本の佛教者が、しばしば侵略の手先として利用されながらも、彼ら自身が侵略主義者であつたかどうかは簡単には決められない。アジアとの関係が強く言われながらも、思想史に即してきちんと分析しようという研究はまだ緒に就いたばかりといわなければならない。

以上のような状況を念頭に置きながら編集された『思想』九四三号では、アジアとの具体的な交流に関する論文としては、R・ジャファイ「祆教を探して——近代日本佛教の誕生と世界旅行」、陳繼東「近代佛教の夜明け——清末・明治佛教の交流」、辻村志のぶ・末木文美士「日中戰爭と佛教」、木場明志「満州国の佛教」の四本が挙げられる。その他、石井公成「大東亜共榮圈に至る華嚴哲学——亀谷聖馨の『華嚴經』宣揚」、大谷栄一「日

蓮主義・天皇・アジア——石原莞爾における世界統一の「ヴィジョン」も、侵略肯定の論理の形成に関する問題を扱つてゐる⁽⁶⁾。

ジャファイの論文は、明治期にインド、スリランカの佛教を学んだ北畠道竜、釈興然、釈宗演らを取り上げ、陳楊文会と南条文雄の交流などを扱う。辻村・末木論文は、一九三四年に東京で行われた第二回汎太平洋佛教青年大会をめぐる中国側と日本側の認識のずれの問題（辻村）、ならびに抗日佛教者樂觀の著作『奮迅集』の分析による中国の抗日佛教の思想（末木）を扱い、木場論文では、満州国佛教總会設立を中心に、日本の植民地政策上いかに佛教が利用されたかを明らかにする。

以上のような論文は、そのいずれをとつても従来日本ではほとんど正面から論じられてこなかつた問題を扱つており、こうした重要な問題がまったく目新しいということ 자체、日本の思想史研究の歪みを如実に反映している。しかし最近、とりわけ中国系の研究者によつて、日本の近代佛教とアジアの関係がクローズアップされ、研究が大きく進展しつつある。そのような状況を以下に紹介しながら、今後へ向けて問題点を考えてみたい。

二、先駆的な研究

まず、このような日本の近代仏教とアジアとの関係に関する先駆的な研究として、中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』（国書刊行会、一九七六）、ならびに小島勝・木場明志編著『アジアの開教と教育』（法藏館、一九九二）を取り上げておく必要がある。

中濃の『天皇制国家と植民地伝道』は仏教のみに限らず、戦争中の日本の諸宗教がどのように植民地主義・侵略主義に加担したかを概観したもので、この種の研究としてはもつとも早いものである。それだけにやや大づかみで、また、宗教の政治的利用の面ばかり強調されすぎているきらいはあるが、中国・朝鮮の両方にわたる日本宗教の全体像を描いたものとして、今日でも高く評価されるものである。中濃はまた、『戦時下的仏教』（国書刊行会、一九七七）を編集しているが、本書はアジア伝道の問題も含め、戦争期の日本の仏教を概観したもつとも定評ある研究書である。

『アジアの開教と教育』は浄土真宗の東アジアへの開教と現地の教育活動を中心とした共同研究の成果で、五名の著者により分担執筆されている。本書の基本的な方

針として、「はしがき」に次のように述べられている。

日本のアジア侵略についての日本人自身の罪悪感と、現地の人々の日本人に対する憎しみ・反日感情が、研究を支え、そして規定してきたといつても過言ではないが、言うまでもなく、こうした認識や感情は永遠に忘れ去られてはならないものであり、子々孫々継承しなければならない。しかし同時に、当時の時代相において、一回限りの人生を真剣に生きた日本人・現地の人々の行路・気持ちを直視しなければならないこともまた確かではないか。かれらの生きた現実を、そのまま、すくい取る。そして多層的・多文脈的な状況に照らして分析する。こうした研究もまた必要なのではないか。（同書、一頁）

この重層的な視点は今後の研究に当たって我々が心なければならないことであり、その点を明白に表明したものとして、本書は研究上の大きな指針を示している。方法的には、本書は歴史的な史料の収集に基づく実証研究であり、思想史的な踏み込みは少ない。しかし、現地での史料収集や実地調査を踏まえるという方法は従来きわめて不十分であり、新しい方法を開拓したるものといえる。まだ現地に眠っている史料は多数にのぼるはずであり、それは、それぞれの国の研究者と共同研究によつて

しか解明できないであろう。この点、本書はもちろん、今日でもまだ十分に確立しておらず、今後に残された課題である。

本書は、第一部において開教の問題を、第二部において開教使と関連した教育事業の問題を取り上げている。

第一部では、中国・満州・朝鮮の場合を取り上げるが、真宗の中でも本願寺派（西本願寺派）よりも大谷派（東本願寺派）を中心に考察している。これは偶然のことではなく、大谷派のほうが海外開教にいち早く着手しており、一八七三年（明治六年）に小栗栖香頂を支那弘教係に命じている。それに対して、本願寺派のほうは十年以上も遅れ、一八八六年（明治十九年）のウラジオストック開教からだという（同書、九頁）。

本願寺派がはやくから勤王派として明治政府とも関係が深く、木戸孝允と島地黙雷の関係を軸にいち早く欧州視察や大教院分離運動などの先頭に立ったのに対し、大谷派はそれに追随しがちであった。その中で、中国布教は大谷派が「この時期に進んで独自に行動した施策」（同、三二頁）であった。島地やいち早く欧米に留学した南条文雄・笠原研寿らがよく知られているのに對して、中国との関係で重要な役割を果たした小栗栖については従来ほとんど知られていないかった。本書や後述の陳繼東

の研究によつて、ようやく光を当てられ、資料の発掘が行われるようになつてきた。第二部第三章では大谷派・本願寺派によるアジアへの留学僧、またアジアからの留学僧の問題を扱つてゐるが、歐米留学と異なるアジア留学の役割や成果を無視することはできない。

三、中国人研究者による最近の研究

先に触れたように、日本仏教とアジアの関係は、近年中国系の研究者によつて大きな成果が挙げられている。そのため、東アジア、とりわけ中国との関係が主になりがちであるが、これはやむを得ないところであろう。²⁷ 今手元にある単行本として、以下のようなものがある。

楼宇烈主編『中日近現代仏教的交流与比較研究』（宗教文化社、二〇〇〇）

何勁松『近代東亜仏教——以日本軍国主義侵略戰爭為線索』（社会科学文献出版社、二〇〇二）

肖平『近代中国仏教的復興——与日本佛教界的交往錄』（廣東人民出版社、二〇〇三）

陳繼東『清末仏教の研究——楊文会を中心として』（山喜房仏書林、二〇〇三）

最後のものは日本語であり、表題には日本との関係は

出てこないが、実際は楊文会を中心とする日中関係が大きな比重を占めている。その他は中国語である。このほかにも中国での関連する出版はあるかもしれないが、管見によるものに限るので、見落としはお許しいただきたい。論文の類は省略するが、例えば、日本の仏教からの影響を思想史的な観点から注目した葛兆光の研究などが注目されている。⁽⁸⁾ 中国では近年近代仏教の研究が盛んであり、日本の近代仏教に関しても一応の前提となる常識は提供されており、こうした背景からこれら最近の研究が生まれてきていると考えられる。

楼宇烈主編『中日近現代仏教的交流与比較研究』⁽⁹⁾ は、もともと一九九六年には完成していたものであり、他に較べてやや古く、また、個人の著作ではなく、六人の著者による八本の論文を収めているので、必ずしも体系的に論じられているわけではない。巻頭の楼宇烈「中日近現代仏教交流概述」はじめ、概論的な論文が多い。樓の論文は、楊文会と南条文雄の交流から、一九二五年の東亜仏教會議や太虛の日本仏教觀に至るまで、要點をおさえて論述しており、樓の巻末論文「中国近代仏学の振興者——楊文会⁽¹⁰⁾」と併せて、信頼できる概説である。姚衛群「日本のインド仏教学研究の中国に対する影響」、方広錆「日本の敦煌仏教文献の研究」は学術面を主とする。

陳少峰「日本近代仏教倫理觀の転換——兼ねて近代日本倫理思想比較研究の観点からみる」は、本書中でもっとも思想史的な観点からの研究で、簡単ながらも日中比較の観点を示している。すなわち、章太炎や梁啓超らへの日本の近代仏教の影響、あるいはその可能性を見る一方で、中国では仏教の博愛主義や意識の独立の思想が公徳主義や個性主義を育てたのに対し、日本では国家主義の尊皇倫理教育に結びついたという点を指摘している。本書はさらに、金勲「無常と日本人の美意識」、魏常海「鈴木大拙の禪學の中国に対する影響」、同「日本近現代仏教新宗派研究」を収めている。

何勁松「近代東アジア仏教——日本軍国主義侵略戦争を手がかりとして」は、侵略時代の日本の仏教と東アジア各地の状況を概論的に述べたものである。その「はしがき」に、本書が主として論じた問題として、次のような点が挙げられている。

- ①一〇世紀前半の日本仏教が、ファシズム政府の下で侵略戦争を遂行したという特殊な歴史的背景の下での組織構成、伝教の方針、伝教の内容などの形態の変化。

②淨土真宗、日蓮宗などの仏教宗派が、占領地区で伝教を行なった具体的な経過と、侵略戦争に協力した

具体的な罪状。

③日本仏教の占領地区での活動が、その地区の仏教の発展に対してなした影響と後遺症。

④仏教宗派が軍国主義と侵略戦争に反対した歴史の分析。

具体的な章立てをみると、第一章「歴史の変革と仏教の対策」、第二章「戦時体制下の日本仏教」、第三章「日本仏教と日本の韓国植民統治」、第四章「日本仏教と日本の中東北（満州）植民地政策と関連させて日本の仏教の展開を論述している。本書は概論的で、従来の研究に依拠するところが大きく、必ずしも著者自身の独自の研究が反映しているわけではない。また、平和を求める著者の熱情は「はしがき」に強く表明されており、其感を呼ぶところではあるが、そのためにはや価値判断が一面化して、侵略への協力か抵抗かという点だけで評価を下す面が否めない。しかし、日本の植民地政策と関連した仏教の動きが全体として概観されており、この問題に関する好個の手がかりとなる。

陳繼東『清末仏教の研究』は、著者が東京大学に提出した博士論文に基づくが、副題にあるとおり、楊文会を

中心とした研究である。書名だけ見ると、中国仏教だけに限定されているように見えるが、楊文会（一八三七—一九一二）は日本の仏教界ともきわめて関係が深く、本書はそのまま近代の日中仏教交流史となつていて、楊文会は、上述の楼宇烈の論文にも取り上げられているように、中国近代仏教復興の立役者となる居士仏教者であり、その後の仏教者で彼の影響を受けなかつたものはひとりもないといって過言でない。

その活動は、出版、教育、海外交流、思想などの幅広い側面にわたる。出版では、金陵刻經處を設立して、多数の仏典の出版普及に努めた。教育では、祇洹精舎を開いて、後進の教育に努めた。多少なりとも楊文会の教えを受けた人には、太虛・歐陽竟無などの仏教者のかに、譚嗣同・章太炎などの革命家・政治活動家も含まれ、その影響力の大きさがうかがわれる。海外交流では、南条文雄ら日本の学者との交流とともに、スリランカの仏教改革者ダルマパーラとも交流をもつた。思想面では、『大乗起信論』の価値を再発見するとともに、独自の淨土教思想を展開した。特に『大乗起信論』の再発見は、後の中国仏教に大きな影響を残すことになつた。

このように、楊文会の活動は近代中国仏教にとって決定的な意味を持つものであり、さらに言えば、「仏教」

という枠を外しても、中国近代思想の形成に大きな一步を記すものであった。それゆえ、中国近代仏教を扱った研究書には必ず論じられるが、しかし、楊文会についての専著はこれまでなく、本書がはじめてである。著者は日本で研究している利点を生かして、日本に残存する多数の関連資料を発見し、それを用いて楊文会の活動を詳細に跡付けている。

とりわけ日本との関係で注目されるのは、第三章「南条文雄らとの交流」、第四章「日本浄土真宗との論争」である。楊文会は、ロンドンで南条とあって以来友情を結び、中国で失われて日本の残存する仏書を送つてもらい、逆に日本の『正統藏經』編纂のために中国の仏書を送っている。第三章ではその書目を詳しく考証するとともに、楊文会以外の南条の中国ネットワークにも触れている。

しかし、思想史の上からより興味深いのは第四章である。ここでは小栗栖香頂（一八三一一九〇五）と楊文会の論争を扱っている。前述のように、小栗栖は真宗大谷派の僧で、中国に留学した上、支那国弘教係として中国への開教に乗り出した。その過程で一八七六年に『真宗教旨』を刊行して、真宗の要諦を中国人に説こうとした。それに対し、楊文会が批判し、さらに小栗栖以外の日本

人も加わって大論争へと展開した。楊文会は日本の淨土教をきびしく批判し、「仏教の衰退は実に禪宗に由る。これは支那ではもとよりその通りであるが、日本では淨土真宗によつて衰退する」（『等不等觀雜錄』卷六、陳、前掲書、二四一頁所引）とまで言つてゐる。その論争の過程で、日本の淨土教の基礎となる法然の『選択本願念仏集』に對しても批判を加えている。

結局のところ、陳が要約するように、楊文会が「復古と総合圓融によつて中国仏教を振興することを目指してゐた。ところが、真宗の選択的立場、その排他的傾向の強い宗旨は、基本的に楊文会の融合的な立場と異なるものである」（陳、前掲書、二六三頁）というところに根本の相違が求められる。しかしその後、小栗栖の本を出版した芝峰のように、「小栗栖香頂が中国で行なつたさまざまの活動を高く評価している」（同、二六五頁）者もいて、中国の佛教界の動向も単純ではない。陳の研究はさまざまな新出資料により、こうした問題点を明らかにした点で、大きな一步を記すものである。

肖平『近代中国佛教の復興』は、中山大学に提出した博士論文に基づくものである。副題に「日本佛教界との交際録」とあるように、日本佛教との関係からみた近代中国佛教の研究であり、概論的な叙述であるとともに、

著者自身の研究や資料を多く含んでおり、これまでの関連研究を総括するとともに、今後の出発点となる大きな成果である。

本書の研究方法として、第一に、原資料の収集発掘を重視するとともに、第二に、「中国側の史料と日本側の史料を対照して使用する」（同書、五頁）ことを挙げ、「同一の事件や人物に対しても、中日双方でしばしば異なる理解と解釈がある」（同）として、複眼的視点を持つとうとしていることはきわめて注目され、かなりの程度それに成功していると思われる。この二点とも、陳の研究にも共通して言えることであり、時を同じくして、基本的な資料を重視しつつ、従来の一面的な研究を乗り越える複眼的な視点に立った研究が出てきたことは心強い。肖平のものは陳繼東のように範囲を限定していないので、部分により精粗はあるが、一九世紀後半から一九三〇年代まで扱っており、大きな展望で見渡すことができる。

本書は、第一章「序論」で研究史や方法について論じた後、第二章「日本佛教徒の中国進出の動機と社会的背景」で、江戸から明治にかけての日本佛教を概観する。

以下が本論的な部分であり、第三章「日本の僧侶の中国伝教活動」、第四章「佛教印刷事業の振興と中日学者の交友」、第五章「仏学研究事業の回復と日本の仏学研究」、

第六章「密教の發展と密教を求めて日本に留学した者たち」、第七章「中日の学者の佛教國際化の努力」、第八章「中国仏教会の日本留学熱」、第九章「日本佛教界と学界の中国巡礼活動」、第一〇章「中国仏教徒の日本調査活動」と続いている。

今これら各章を詳しく紹介する余裕はないが、思想的に見ても興味深い問題は各所に散在している。例えば、第五章では、日本で発した『大乘起信論』の中国撰述問題が、中国に飛び火して、欧阳竟無派と太虛派の対立する論点となつたこと、第六章と第八章では、中国に日本密教ブームが起り、密教を求めて日本に留学した僧が何人もいたことなど興味深い。第七章では、楊文会と太虛の国際的な活動を跡付けるが、とりわけ太虛の場合、日本側の侵略と結びついた国際活動にどう対峙するかということが問題になり、複雑な様相を呈する。第一章では、中国側の日本佛教觀がうかがわれる資料が多數提示されている。

陳繼東と肖平の研究によつて近代の日中佛教交流に関する研究は大きく前進することになった。ただこれまでのところ、その研究は中国人研究者によつて進められてきており、日本側の研究者の関心はいまだ必ずしも高くない。また、歴史的な状況の解明がまずなされなければ

ならないため、思想史的な分析はまだまだ遅れている。さらに、韓国仏教との関係など、それ以上に研究が遅れている。今後に残された課題は非常に大きなものがある。

四、広い視野から

以上、中国との関係を中心に最近の研究を紹介しながら、その問題点を探つてみた⁽¹⁾。それでは、東アジアを越えてより広範なアジアの仏教との交流はどうであろうか。インドに関しては、春日井真也の先駆的な仕事などがあるが、まだきわめて遅れている。先の『思想』特集号におけるジャフィの論文などが指針となるものであるが、それに加えて、佐藤哲朗によるインターネットのサイト

『大アジア思想活劇』(<http://homepage1.nifty.com/boddo/>)を挙げておきたい。これは、第一部「明治二十一年の印度旅行からオルコット来日まで」と、第二部「ランカーの獅子」・ダルマパーラと日本」からなり、いまだ完成していないが、第一部では神智協会のオルコットの来日や講談師野口復堂のインド旅行など、第二部ではスリランカの仏教改革者ダルマパーラの来日など、従来無視されてきた重要な問題を扱っている。

インドの問題は岡倉天心などのアジア主義などとも絡めて、今後より広い視野から検討する必要がある。例えば、東アジアの範囲を超えた「大東亜」の問題がクローズアップされたとき、インドに発し日本にまで及ぶ仏教がその文化的一体性を証するものとされた。インド・中国・日本という「三国史観」がしばしば前提とされ、朝鮮や東南アジアが排除されるのである。もう一方では、日本の「大東亜」構想を反欧米植民地主義として合理化するために、インド独立運動との結合を求めた。こうして、インドはきわめて重要な意味を持つてきて、その中で仏教に大きな役割が課せられたのである。これらの解明も今後重要な意味を持つであろう。

ところで、このようなアジアとの関係の問題を考えゆくとき、狭く仏教だけに限らず、近代思想研究全般に関しても似たような状況にあることに注意しなければならない。筆者は京都学派に関する小文で、以下のように述べた。

ところで、日本の研究者の立場から京都学派を見るとき、従来ほとんど無視されてきたもう一つの見方のあることを指摘しておきたい。従来、西欧哲学と比較しながら京都学派を論じ、あるいは位置付けるのがふつうであった。しかし、京都学派は、アジアが近代化する中で、いかに近代化に対応しつつ、同

時に伝統思想を生かそうとするかという苦闘の歴史のひとつの中での伝統の再発見という点で、他のアジアの思想家・哲学者たちと比較することこそ、歐米の哲学者との比較以上に重要なことははずである。¹³しかし、この作業は意外なほど進んでいない。

この小文では、そのような新しい方向を示す例として藤田正勝・卞崇道・高坂史朗編『東アジアと哲学』(ナカニシヤ出版、二〇〇三)を挙げたので、同書についてもう少しみておきたい。これは二〇〇〇—二〇〇一年に二回にわたって行なわれた国際シンポジウムに基づくものであり、日本・中国・韓国、それに欧米の研究者が加わって計二五本の論文が収録されている。それらは、I・世界の文化と東アジア間の対話、II・東アジアと西洋哲学、III・日本哲学と東アジア的思惟の相克、IV・中國の日本研究に分けられている。多数の執筆者により多様な観点が示されており、非常に興味深いものではあるが、具体的な近代東アジア間の哲学の相互影響や比較は必ずしも十分ではない。第二十四章「翻訳から見た二十世紀中日文化交流」(魯旭東)が具体的な事例に関する両者の関係を論ずるほか、第十八章「二重性」と「和合性」——「日中近代哲学変容の比較」(季甦平)は日中における

近代哲学の受け止め方を比較しているが、あまりに概括的すぎる。

そもそも西欧から受け入れた哲学とは何だったのか、そしてそれと伝統思想がどう格闘したのか。そのことを東アジア共通の課題として、比較しながら具体的に追う作業こそ重要であるが、それは今後の課題として残されている。例えば、西欧哲学の受容に関しても、日本のアカデミズムが早くからドイツ中心の立場を取り、とりわけアメリカ系のプラグマティズムはアカデミズムの外に追いやられたのに対し、中国では、胡適の渡米やデューアの来華などにより、アメリカ系の哲学の影響が著しい。そのような近代哲学受容の差異をきちんと比較してゆく作業がこれから必要となる。今後に残された課題はきわめて大きい。

今日、アジア論が思想史上の大きな問題として取り上げられるようになつていて¹⁴いる。それが空回りに終らないためには、複眼的な視点をしっかりと保ち、大きな見通しを持つと同時に、新たな資料を発掘しながら、個別的な事象に即した地道な実証研究を進め、影響関係や相互比較などをきちんと解明してゆく作業が要請される。そのような広い展望の中で、仏教思想もまた改めて見直す研究が進められなければならない。¹⁵

注

(1) いの特集と関連して、1991年1月トロントで開かれたアメリカ宗教学会(American Academy of Religion : AAR)では、Colonialism, Transnational Exchange, and Buddhism in China, Korea, and Japan ハーバーベルが設けられ、筆者も参加した。

(2) 概論的なものとして、柏原祐泉『日本仏教史・近代』(吉川弘文館、1990)、吉田久一『近現代仏教の歴史』(筑摩書房、1998)、池田英俊『明治の仏教——その行動と思想』(評論社、1976)などがある。

(3) 市川白弦『仏教の戦争責任』(春秋社、1970)、同『日本ファシズム下の宗教』(エヌエス出版会、1975)、戸頃重基『近代日本の宗教とナショナリズム』(富山房、1961)など。中濃教篤については本文に後述。

(4) Brian A. Victoria, *Zen at War*, New York: Weatherhill, 1997. 本書について、拙稿「B・ヴィクトリア『禅と戦争』の提起する問題」(『鈴木大拙全集』新版第三巻月報、岩波書店、1990)参照。エイミー・ルイーズ・ツジモトによる邦訳『禅と戦争』(光人社、1990)は、残念ながら誤訳が多く、信頼できない。

(5) 今村仁司『清沢満之の思想』(人文書院、1991)。

(6) その他、本書には、末木文美士「内への沈潜は他者へ向うるか」、今村仁司「清沢満之と宗教哲学への道」、M・モール「近代「禅思想」の形成」、葛兆光『『海潮音』の十年』、下田正弘「未来に照らされる仏教」を含む。

(7) 台湾で出了るものとして、藍吉富『二十世紀的中日仏教』(新文豊出版公司、1991)があるが、これは中国と日本の二〇世紀の仏教に関する問題を別々に論じており、必ずしも両者の交流に関するものではない。陳玲蓉『日撫時期神道統制下的台灣宗教政策』(自立晚报社文化出版社、1992)は、仏教も含めたこの時期の台湾の宗教状況を論じたものとして基本となる。論文であるが、江燦騰「日撫時期「日華親善」架構下的日中台三角國際新仏教思想交流」(『思与言』三八一、1990)も注目される成果である。

(8) 葛兆光『西潮却自東瀛来』(『葛兆光自選集』、広東師範大学出版社、1997)。他の関連する研究については、肖平の著作の第一章の研究史を参照。

(9) 楊曾文主編『日本近現代仏教史』(浙江人民出版社、1996)。

(10) 和訳(坂元ひろ子訳)のほうが先に、『東洋学術研究』二五一一(1986)に発表された。

(11) いの分野に関する拙稿として、前掲の『思想』特集

号における辻村との共同執筆論文の他、「日本侵略下の

中国仏教」（『季刊仏教』四九、二〇〇〇）、「太虚の抗

日仏教」（阿部慈園博士追悼論集『仏教の実践法』、春

秋社、二〇〇三）がある。

（12）春日井真也『インド——近景と遠景』（同朋舎出版、一九八一）に、岡倉天心らとともに、堀至徳が論じられている。

（13）拙稿「京都学派と仏教」（『日本仏教34の鍵』、春秋社、二〇〇三）、二八〇—二八一页。

（14）孫歌『アジアを語ることのジレンマ』（岩波書店、二〇〇二）、子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか』（藤原書房、二〇〇三）など。

（15）拙稿「日中比較より見た近代仏教」（『現代日本と仏教』三、平凡社、二〇〇〇）は、そのような方向へ向けてのきわめて荒いスケッチである。

（東京大学教授）